

研究課題：地域の記憶の継承に向けた実践的研究

－ 神戸学院大学地域研究センター明石ハウスを拠点として－

地域研究センター明石ハウスは、人文学部の教員が中心となり、明石市大蔵地区の地域住民との協働を目指した取り組みを行っている。2015年度から「大蔵谷ヒューマンサイエンスカフェ（以下、HSカフェ）」を実施し、教員や学生の研究・学修の成果を地域に還元し、地域住民と共に学び、成長するため定期的な交流の場を設けてきた。

2018年度からは「地域の自画像」に着目し、地域社会に暮らしてきた人々の記憶を可視化する記憶のアーカイブ構築の取り組みを開始した。地域の記憶やイメージ、すなわち「自画像」は、戯曲や歌など様々な媒体に変換されつつ継承してゆくことで、より多くの人々や世代をまたいで共有し、継承（あるいは再生産）することができる。そこで地域を素材にした戯曲の制作・上演を通じた記憶継承の実践を行っているほか、写真資料を素材にした歴史の表出（写真展）なども実施している。

ところが2020年2月以降、新型コロナウイルスの感染拡大により地域住民と対面での交流を行うことが難しくなった。この活動に参画している地域の方々の多くが高齢であり、命を危険にさらすようなことがあってはならないという強い危機感から、2021年度は大幅な計画変更を余儀なくされた。

そこで、HSカフェは特別編として「明石の和歌」と題した講演全3回を動画で配信した。講師は中村健史准教授が務め、第1回は柿本人麻呂「天ざる 鄙の長道ゆ恋ひくれば 明石の門より大和島見ゆ」、第2回は山部赤人「沖つ波 辺波静けみ漁りすと 藤江の浦に船ぞ騒げる」、第3回は細川幽齋「夕日影あかしの岡の跡訪へば 昔おぼゆる松風ぞ吹く」を取り上げた。それぞれの歌を丁寧な解説で読み解き、明石と歌人との関わりをより深く理解できる内容となっている（地域研究センターHPより視聴可）。

また明石ハウスが開室できない間、インターネットを通じて明石ハウスについて知っていただくことのできる紹介動画を作成・公開した（URL：<https://www.youtube.com/watch?v=EjcVrLr2EaI>）。動画は周辺の街と建物、各種イベントについて写真と字幕で説明する3分程のもので、今後も会場のモニター等で繰り返し流すなどの用途が見込まれるコンテンツである。

さらに2019年度に実施したくずし字解読講座の成果として、講師（中村真理氏）と参加者が協働し、成果報告書を刊行した。これは講座のテキストである『播州名所巡覧図絵』明石郡について、本文画像、翻字（活字起こし）、現代語訳、注釈をまとめた全110頁の冊子で、同書の現代語訳および注釈が刊行されたのは学界初である。講座の参加者らが、記載された名所について現在と対比しつつ、フィクション（実際は眺められない景色が記載されているなど）の部分や開発等で失われたかつての風景について議論を交わし、それらが注釈として付記されていることも特徴的である。郷土資料として広く活用が見込まれることから、明石市などの図書館に寄贈した。

中山ゼミによる演劇公演「アタシノアカシ」は、明石ハウスでの上演こそ叶わなかったものの、例年通り学生による脚本執筆から公演までが実施された。今年度のテーマは「明石とコロナ」。戯曲のルールをふまえ、学生がそれぞれ脚本を書き上げた後、全員の投票で上演される戯曲3本が選ばれた（「夏に揺れる、淡藤色と（住吉神社の藤）」、「絵本のサンタクロース（明石市図書館の試み）」、「宵狸の馬鹿し合い（明石駅前のタヌキ）」）。その後読みあわせ、演技指導等を経て学内で公演が行われた。映像化するため、上田ゼミが協力して撮影も行われた。なお脚本の執筆と演劇指導には外部講師を招き、本格的な公演に仕上げた。さらに成果をまとめた戯曲集『アタシノアカシ 戯曲アンソロジー』2冊が刊行された。

一方、稲爪神社境内で例年行っている正月写真展は、これまでに撮影した写真の中から選りすぐった作品を「プレイバック編」として展示した。祭りでの地域の方々の活きいきとした様子を中心に選定し、休止されている各行事の記憶が少しでも継承されれば、という想いを込めた。

今年度の活動の多くは例年と異なる形となったが、刊行物や写真展を中心に一定の成果を挙げることができた。さらにリモートでの活動を見込み、大型モニター、集音マイク、ウェブカメラを購入した。感染防止対策を講じつつ活動を再開する方法について、今後具体的な検討を進める予定である。